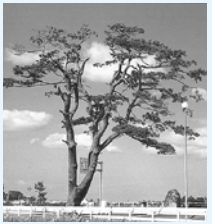
町長コラム

温故創新

松枯れ



明治38年に長崎県で松枯れの最初の記録があり、山形県では昭和53年が始まりとされています。全国の被害面積は令和5年が31万㎥、令和6年が39万㎥、令和7年が63万㎥と増えています。

庄内海岸林は令和4年ごろまでは、2万㎥の被害でしたが、令和6年が10万㎥、令和7年は32万㎥と全国の被害の半分は山形県となっています。また、海岸線のみならず、庄内空港やわが庄内町でも多く散見されるようになりました。

町の文化財でもある舟つなぎの松も、樹幹注入で何とか持ちこたえていましたが、今年5月に伐採となり、9月には廿六木集落を疫病から守ったという下塚の松も松枯れにかかったと報告を受けています。今年度は、近隣の自治体と同様に伐採補助金を予算化したところです。

しかしながら、当初予算では全然足りず、結果的に補正で年度当初の6倍の予算額となりました。



これでも、町全体の被害状況からするとまだ予算が足りていない状況です。

松枯れは、マツノマダラカミキリが原因となるマツノザイセンチュウを体内に入れて松に運ぶことによって広がる伝染病です。庄内地方がこれほど被害拡大した原因として、被害木の切り残し、猛暑、少雨による松の衰弱、民間林への対応の遅れなどが挙げられています。

対策として、健全な松への樹幹注入や薬剤散布、耐性を持つ松への植え替えなどがあります。国でも、抵抗性を持つ品種の開発を進めていますが、決定的な品種の確立には至っていません。

松枯れは景観だけでなく、安全・安心の生活を守る上でも大きな課題となっています。1日でも早い解決につながるよう要望活動や予算計上、効果的な実践活動を加速させていきます。

庄内町長　富樫　透